



編集責任者
山村 準
tel: 0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会
発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：200部
つつじが丘：430部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
(9地区)
名張市議会：20部
名張市役所：20部

イノシシ対策 収穫後の田圃の管理

昔からイノシシは賢い動物として知られていますが、だが、イノシシの頭の良さを甘く見てしまい、痛い目に遭っている人が多いです。イノシシは嗅覚が優れているため、目はあまり使わないと思いがちですが、あの小さな目をしっかりと使い、様々なものを見て生きています。イノシシは犬より賢いともいわれています。

防護柵を設置しても、中が丸見えではイノシシは執拗に侵入を繰り返します。田畑の中が見えないように遮光ネットやトタンで目隠しの効果を加えることで、防護効果は上がります。電気柵の設置で最も重要なことは、電線を張る高さです。イノシシは剛毛に覆われていて通電するのは鼻の先だけです。大雑把な高さで線を張っても効果は得られません。また、電気柵の効果を持続させるためには、電線に雑草などが絡まないようにこまめな管理が必要で

す。電線に草が絡まると漏電し効果が半減します。被害を起すのは山際の藪や耕作放棄地・集落に潜むイノシシで、山の10頭より集落の1頭で、被害を出す固体を特定し捕獲することが重要です。稲刈りが終わって今年の獣害対策は終了と思っている農家が殆どで、来年の対策の始まりと認識している方は少ないと思います。

刈取り後の水田がイノシシ対策の盲点になっていて、稲刈り後の対策をしっかり行うことで、来年以降の被害を減らすことができます。秋口から冬にかけては鳥獣を誘引しない営農管理が必要で、近年、稲刈り時期が早まり、9月下旬には殆どの農家で収穫が終わっている状況です。それに伴い2番穂(ヒコバエ)の発生も早く、秋に温暖な天候に恵まれれば、立派な稲穂を実らせませす。このヒコバエに突っ

た米がイノシシの餌となり、被害を助長する大きな原因となつていきます。ヒコバエは、イノシシにとって冬を乗り切るために沢山食べなければならぬ、10月～11月の大切な餌になっていきます。ヒコバエが発生することにより田圃周辺を餌場だと学習し、その周辺を生活拠点にするようになり、被害がどんどん酷くなつていきます。イノシシは、学習能力が高く、安全に餌にありついた田圃には、翌年は必ずといっていいほど侵入してきます。ヒコバエの米なんて大した量じゃないと思つている人もいるでしょうが、滋賀県の調査で、来年以降の被害を減らすことができません。秋口から冬にかけては鳥獣を誘引しない営農管理が必要で、近年、稲刈り時期が早まり、9月下旬には殆どの農家で収穫が終わっている状況です。それに伴い2番穂(ヒコバエ)の発生も早く、秋に温暖な天候に恵まれれば、立派な稲穂を実らせませす。このヒコバエに突っ

良質の土壌を作ります。土作りも併せて行うには、気温が高くワラが分解しやすい10月中旬までに行うことです。秋耕は、集落一斉に行う事が大事で効果が上がります。自分の田んぼにヒコバエが沢山生えていることを恥ずかしいと思えるようになった集落ではイノシシ被害が減っていくでしょう。収穫残渣も冬の貴重な餌になります。収穫時に発生する残渣は、コンポストで堆肥化するか、鋤き込むなどして餌にならないようにしましょう。畦畔の草刈は出来るだけ遅らせましょう。地域や陽当りによっても異なりますが、9月下旬～10月に畦畔やため池の堤体の草刈りをする、12～2月に青草が生え、餌づけ状態になります。冬場には枯草しかない状態にしておきましょう。また、イノシシの好物ミミズなどの発生を防ぐために、刈り取った草は畦に放置せず圃場に鋤き込みましょう。秋口は、防護対策上重要な時季となります。

明治次代～昭和初期 獣害の無かった100年

私たちが日本人と野生動物は、3万年もの長い間、共存してきた歴史を持っていきます。江戸時代までは大型野生動物が絶滅した事例はなく、先人は苦勞しながら野生動物と一緒に暮らし生きてきました。例えば、長さ20～30cmのシン垣を作つて、集落の周りを覆うことで、獣の侵入を防いでいたり、それに加えて、シン番を置き24時間体制で見張りをしたり、人のにおいを嫌がるので髪の毛を置いたり、鉄を嫌うというので脚立のようなものを置いたりしていたとも言われています。しかも、このような対策は、公共事業として行っていたという記録が残っています。しかし、近年での被害は農林業被害に止まらず、生活環境被害や人身被害にまで広がり、基本的な対策が分からず頭をかかえているというのが現状です。

明治から昭和初期にかけて、新式銃の導入により野生動物の乱獲が進み、サル、クマ、イノシシ、シカは、いずれも壊滅状態になっています。この頃は、山の近くで畑を耕作していても、そもそも動物がいなかったため、被害は殆どなかったようです。人と動物の間を振り返って見るとき、この100年間は野生動物が絶滅寸前まで追い込まれた年代で、それにつれて獣害が殆どありませんでした。しかし、言い換えれば、異常な100年だったとも言えます。現在は、国が野生動物の保護政策を推進して40～50年が経つており、動物の数も増え、拡大や里山の荒廃が進み動物が山奥から下りてきやすくなりました。このようなことが要因となり、再び動物が急増し人間の前に現れ、獣害が高まっています。獣害が社会問題となつて久しいですが、獣害が無かった時代が100年間も続いた関係で、それまで先人が培ってきた獣害に対する知識や気概さえも途切れていて、私達は、今何をしても良いか分からないというのが現状ではないでしょうか。野生鳥獣VS人間とい

うのが現状です。明治から昭和初期にかけて、新式銃の導入により野生動物の乱獲が進み、サル、クマ、イノシシ、シカは、いずれも壊滅状態になっています。この頃は、山の近くで畑を耕作していても、そもそも動物がいなかったため、被害は殆どなかったようです。人と動物の間を振り返って見るとき、この100年間は野生動物が絶滅寸前まで追い込まれた年代で、それにつれて獣害が殆どありませんでした。しかし、言い換えれば、異常な100年だったとも言えます。現在は、国が野生動物の保護政策を推進して40～50年が経つており、動物の数も増え、拡大や里山の荒廃が進み動物が山奥から下りてきやすくなりました。このようなことが要因となり、再び動物が急増し人間の前に現れ、獣害が高まっています。獣害が社会問題となつて久しいですが、獣害が無かった時代が100年間も続いた関係で、それまで先人が培ってきた獣害に対する知識や気概さえも途切れていて、私達は、今何をしても良いか分からないというのが現状ではないでしょうか。野生鳥獣VS人間とい

うのが現状です。明治から昭和初期にかけて、新式銃の導入により野生動物の乱獲が進み、サル、クマ、イノシシ、シカは、いずれも壊滅状態になっています。この頃は、山の近くで畑を耕作していても、そもそも動物がいなかったため、被害は殆どなかったようです。人と動物の間を振り返って見るとき、この100年間は野生動物が絶滅寸前まで追い込まれた年代で、それにつれて獣害が殆どありませんでした。しかし、言い換えれば、異常な100年だったとも言えます。現在は、国が野生動物の保護政策を推進して40～50年が経つており、動物の数も増え、拡大や里山の荒廃が進み動物が山奥から下りてきやすくなりました。このようなことが要因となり、再び動物が急増し人間の前に現れ、獣害が高まっています。獣害が社会問題となつて久しいですが、獣害が無かった時代が100年間も続いた関係で、それまで先人が培ってきた獣害に対する知識や気概さえも途切れていて、私達は、今何をしても良いか分からないというのが現状ではないでしょうか。野生鳥獣VS人間とい

ナラ枯れ拡大

日本の森林は病んでいきます。遠目には青く茂つてはいますが、人工林の荒廃。それに加えて細菌による樹木の集団枯死が蔓延してきて不健康な状態です。1970年代後半からマツ枯れが激増し、1980年代からはコナラ、ミズナラなどの集団枯死(ナラ枯れ)が目立つようになり、毎年被害地域が拡大して、マツ枯れと共に最近問題となつて

るのがナラ枯れです。マツ枯れは、マツタケという副産物に影響が及んだので関心度は極めて高く、航空機による農薬散布などが全国的に実施されたことは記憶に新しいです。一方、ナラ枯れの最も古い被害記録は、1934年の南九州におけるシイ・カシ類の被害です。ナラ枯れはミズナラやコナラなどのブナ科の木が、マツ枯れと同じように集団で枯れる伝染病の一種で、カシノナガキクイムシ(カシナガ)という甲虫が運ぶ病原菌が引き起こすと考えられています。カシナガは日本に昔からいた在来種。数年前で終息した地域もありましたが、1980年代以降に発生した被害は終息せず現在も拡大しています。人間の生活様式の変化が、マツ枯れ・ナラ枯れ被害の背景にあります。里山を放置したり、薪炭産業の衰退で広葉樹が大径化したなどナラ枯れの要因の一つといわれています。一般的にはナラ枯れの周知度は極めて低く、残念ながら殆どの人が無関心だと思えます。だが、広葉樹林帯には、森林の土壌が降水を貯留し、河川へ流れ込む水の量を安定させる機能や、雨水が森林土壌を通過することに

により、水質が浄化する水源涵養機能など多面的機能が、ナラ枯れが蔓延することにより、それらが失われるなど、人間生活に大きな影響を及ぼす問題をはらんでいます。さらに、今、深刻化を見る獣害問題にも大きな影響が出ることが予想されます。野生鳥獣はその年の、山の木の実は豊凶に大きく左右されて生きています。豊凶は気候状況にもよりますが数年毎の繰り返しで起こっています。豊作の翌年は子供がたくさん生まれ、一方凶作の年は、人里への大量出沒が起こり農作物被害が多発します。樹木の伝染病であるナラ枯れは、放置すれば感染被害は広がる一方です。マツ枯れの轍を踏まぬためにも、早急な防除対策が望まれます。

このように、ナラ枯れは、森林の健全性を脅かすだけでなく、水質浄化や水源涵養機能など多面的機能が、ナラ枯れが蔓延することにより、それらが失われるなど、人間生活に大きな影響を及ぼす問題をはらんでいます。さらに、今、深刻化を見る獣害問題にも大きな影響が出ることが予想されます。野生鳥獣はその年の、山の木の実は豊凶に大きく左右されて生きています。豊凶は気候状況にもよりますが数年毎の繰り返しで起こっています。豊作の翌年は子供がたくさん生まれ、一方凶作の年は、人里への大量出沒が起こり農作物被害が多発します。樹木の伝染病であるナラ枯れは、放置すれば感染被害は広がる一方です。マツ枯れの轍を踏まぬためにも、早急な防除対策が望まれます。

このように、ナラ枯れは、森林の健全性を脅かすだけでなく、水質浄化や水源涵養機能など多面的機能が、ナラ枯れが蔓延することにより、それらが失われるなど、人間生活に大きな影響を及ぼす問題をはらんでいます。さらに、今、深刻化を見る獣害問題にも大きな影響が出ることが予想されます。野生鳥獣はその年の、山の木の実は豊凶に大きく左右されて生きています。豊凶は気候状況にもよりますが数年毎の繰り返しで起こっています。豊作の翌年は子供がたくさん生まれ、一方凶作の年は、人里への大量出沒が起こり農作物被害が多発します。樹木の伝染病であるナラ枯れは、放置すれば感染被害は広がる一方です。マツ枯れの轍を踏まぬためにも、早急な防除対策が望まれます。

このように、ナラ枯れは、森林の健全性を脅かすだけでなく、水質浄化や水源涵養機能など多面的機能が、ナラ枯れが蔓延することにより、それらが失われるなど、人間生活に大きな影響を及ぼす問題をはらんでいます。さらに、今、深刻化を見る獣害問題にも大きな影響が出ることが予想されます。野生鳥獣はその年の、山の木の実は豊凶に大きく左右されて生きています。豊凶は気候状況にもよりますが数年毎の繰り返しで起こっています。豊作の翌年は子供がたくさん生まれ、一方凶作の年は、人里への大量出沒が起こり農作物被害が多発します。樹木の伝染病であるナラ枯れは、放置すれば感染被害は広がる一方です。マツ枯れの轍を踏まぬためにも、早急な防除対策が望まれます。

よりも、先ず、ナラ枯れ対策を先行すべきではないでしょうか。
 ナラ枯れの被害は梅雨明け後、7月中旬から8月にかけて発生。萌芽更新により、若い小径木の低林に戻すことが必要です。大径化することでナラ枯れが、促進されるといわれています。今後の発生状況を注意深く監視する必要があります。
 近頃、つつじが丘の

つつじが丘 ハナレザルの現状

ハナレザルは、遊動域を広め、夏見周辺への出没が多く、積田神社付近では、女性への抱きつき被害が頻発しています。ハナレザルは、しばしば遠くまで移動することがあります。延々と60キロも仲間を求めて移動した事例もあります。つつじが丘のハナレザルのように、人馴れの進んだ個体は、場所が変わっても、その環境に容易に定着していきます。普段サルを見かけない地域で一

ちょっと一服 『カナリアの唄』に思う

♪歌を忘れたカナリアは後ろの山に棄てましょか、いえいえ、それはかわいそう
 ♪歌を忘れたカナリアは背戸の小藪に埋けましょか、いえいえ、それはなりませぬ
 ♪歌を忘れたカナリアは柳の鞭でぶちましょか、いえいえ、それはかわいそう
 ♪歌を忘れたカナリアは象牙の舟に銀のかい月夜の海に浮かべれば 忘れた歌を思い出す
 カナリアの唄と獣害問題を重ねて考えると 身につまされる思いがします。
 人間の身勝手な獣害の背景にあります。殺さずに獣害を解決する道はないのでしょうか。
 西条八十も「それはなりませぬ」と無謀な行為を戒めています。

頭で徘徊しているサルは、ハナレザルだと思っ
 て警戒を怠らないで下さい。サルを見かけたら、先ず大勢で追い払いをかけることが基本です。
 ニホンザルは基本的に警戒心が強く人間には近づかない動物ですが、長期にわたり居付いてしまうと、人馴れが進み人間を恐れなくなり家屋侵入や人的被害に発展してきます。
 今、つつじが丘では被害防止のため、防除

対策と有害捕獲を平行して実施しています。捕獲については、7カ所に罠を設置し取り組んでいます。自然界での餌が豊富な時季なので、罠による捕獲は困難を極めています。また、「広報つつじ」を通じて、現状報告など住民に協力を呼びかけています。
 ハナレザル問題を、地域全体の問題と捉え住民パワーを結集してサル被害に立ち向かうことこそが、解決への最善の近道と考えます。

サル出没情報

サル達にとって秋は、豊かな季節で、山に餌となる山栗やアケビなどが豊富に実る季節で、里の農作物に依存しなくても山の「なりもの」で充分賄える時季です。
 本年産の子ザル達も、乳離れをし自然界の木の実などを食べるまでに成長していると思われまふ。サルに限らず野生鳥獣達は、山の木の実は豊凶に大きく左右されて生きています。

何年かに一度豊作があるかともうと、山の「なりもの」が凶作の年は、農作物に大きな被害が発生します。
 8月末からのA群の動きを見ると、青蓮寺湖周辺に集中しています。集落への出没は少なくなっています。青蓮寺湖周辺には、山栗など山の「なりもの」が沢山あり、それに集中しているのかも知れません。B群では、名張市農林資源室からの出没情報は、発信機の電池切れで途切れています。

各地域住民への聞き取り調査でフォロウできないものでしょうか。出没情報はサル対策上不可欠。一日でも早い復活を切望します。
 ☆獣害対策研修会開催予定
 獣害多発に伴い、被害対策が必要不可欠な課題となっております。被害実態の正確な把握、加害獣の生態と行動の解明、集落環境の点検・整備など総合的な対策が必要です。

つきましては、左記の通り研修会開催を予定しています。
 場所：比奈知市民センター
 日時：平成30年11月25日午後7時～9時。詳細については11月号猿新聞に掲載致します。
 獣害でお困りの方、何方でも受加をお願い申し上げます。是非の二

サル対策の現状
 つつじが丘に、昨年の秋頃からハナレザル2頭が侵入し、居ついていて被害が拡大しています。今でもサルの出没はありまふが、一般的に多く、主に空き地で作っている野菜や果物、ガレージに置いていた食糧などが被害に遭う「家庭菜園被害」というものでした。しかし、最近では「威嚇」「引寄せ」「噛みつき」「盗み」等の「人身被害」や家の中に入って来る「人家侵入」といった事態が発生しています。また定着性もあるといわれています。それらに伴って、不安や不快感といった精神的な問題も発生しています。

★ これらのサルの特徴
 ① 軽やかで、洗濯物などで遊ぶ。
 ② 子犬に対して向かっていく。(遊ぶかと思われ)
 ③ 主に児童や女性(弱者)に対して後ろから抱きつき、

★ 現在のつつじが丘自治連合会の対策
 ① 出没情報の収集
 ② 被害防止のための啓発活動

加をお願い申し上げます。是非の二

